

# サークル戦線

明治大学文化サークル連絡会議

曰 次

明大文化サークル連絡会議結成宣言

「文化サークル連絡会議を結成するにあたっての若干の総括」

教育研究会

社会思想研究会

理論社会学研究部

「たゞひと」No.5 「現代の事としての宗教批判」序説 YM(W)CA

アジア研究会

英字新聞会

文研活動状況

サークル運動論へ向けて

37 32 28 28 28 17 15 3 12 2

# 明大文化サークル

## 連絡会議結成宣言

（サークル活動に於ける「なれ合い」を拒絶し、「混迷」と停滞の壁を突破せよ、  
創造的サークル運動の展開を賭けて共に團結せん／＼

7・1・2  
1・2・3

明大の全ての学友諸君！ 両派性 内容  
今われわれは日本階級闘争の一翼たるべき文化芸術戦の構築に向けて、その苦難に満ちた斗いの第一歩を文化サークル連絡会議の結成をもって歩み出さんことをここに宣言する。

個別わが明大においては、六九年明大全共斗運動の後退過程にあって、大学支配権力はクラスにおける授業・サークルにおける文化創造活動に対し、再び、前にも増して反動的弾圧を加えている。  
われわれは、その具体的な表象としてあった学生会館の全面ロックアウトに対する非妥協的斗争の中で団結したサークル員達である。現在、われわれは学生会館を共同で実力解放して行く事を超え、文化を結ぶ創造していける斗争を経みつつある。  
全ての学友諸君！ もしわれわれが自己解放・人民の解放を志向するならば、それを東納する一切の支配権力との斗いは必至である。

われわれ文化サークル連絡会議は十・十九本校地区学生連実力解放斗争を闘う中、共に決起したサークル員によって形成してきた。われわれが結合を開始した初期に於いては、主に、六九年サークル連合闘争委員会（以下サ連闘と略す。尚サ連協ではないことを付記する）をわれわれの現在の存在——意識との関連性の中で総括していく。何故ここでサ連斗の総括をもたらさねばならないのかを述べるなら、社会的矛盾との対決の中で日々闘争を組織していくとするわれわれは常に、「前しか見えない」状況に陥る危険を抱え持っているからであった。「過去の歴史」は「これから歴史」を創造する糧としてとらえねばならない。われわれは否定的にされ、肯定的ともあれ過去の歴史を踏まえなければならぬ

- 2 -

## 「文化サークル連絡会議を結成するにあたつての若干の総括」

いだろう。何故なら、客觀的歴史と現実を観ることなく闘うのは、定めし、酔っぱらいの自隠し運転、みたいなものなのだからである。かかる觀点に立もつて、文化サークル連絡会議という現在的課題に応じてサ連闘を総括していくことは、われわれ自身よく犯しがちな誤りとしての「総括の為の総括」を克服する方法であったと確認できるだろう。すなわち、「何故われわれは学館解放闘争を闘うのか」という問題を、両者に共通項的存在としてある「サークル員」という次元から、サ連闘を総括する中で、解明していくこととして方法が提示される。

サ連闘などと言つても、今となつては知る人ぞ知るといふ時代であるから、ここで簡単に触れておきたい。  
六十九年春季より、大学立法粉砕・六項目要求を掲げて第二次明大闘争がパリケート・ストライキをもつて闘われたのであった。当時、日常政治権力によるなり振り構ぬ弾圧立法に対して、大学立法実力粉碎の闘いが各クラス・サークルから続々とまき起つていったのだが、そういう大衆的昇揚の中で、各々個別に決起した各サークル闘争委員会を如何に収容するかという点でサ連闘が形成されていったのである。それは読んで字の如く、サークル闘争委員会の連合体として位置付けられていた。しかしサ連闘は現象面においては約一週間程で機能停止、

即ち事實上の解体過程に入つていったのである。建設即解体という過程で、サ連闘が果してどの程度の内実を有しえたかという問題がありつも、これを総括する前提的評価として、サークル員自身が全共闘運動の一翼を担わんとしていたことの意識性を徹底も軽視するものではない。  
サークルを（S）という記号で、サークル闘争委員会を（T）という記号で表すと、サ連闘は、サークル S<sub>1</sub> S<sub>2</sub>、S<sub>3</sub> 内部で組織されたサークル闘争委員会 T<sub>1</sub>、T<sub>2</sub>、T<sub>3</sub> で形成されていた。先進部分を結合させるという方向性・組織方針は闘争を進める上での原則であり誤りはないと言える。総括されるべき事は、サ連闘がそれ内部において、そして、その外部との関係において、如何なる運動が志向・展開されていったのかという事である。

端的にまとめあげると、(1) サークルの先進部分 (T<sub>1</sub> T<sub>2</sub>、T<sub>3</sub> ...) の間における相互発展を目的とした思想闘争の欠如、(2) サークル闘争委 (T<sub>1</sub>、T<sub>2</sub> ...) がサークル總体 (S<sub>1</sub>、S<sub>2</sub>、S<sub>3</sub> ...) から切り離れることによつて、個別サークル (T を含む S) における日常不斷の意識潮流と、革命的發展を妨げた事。(3) 根本的にはイデオロギー的対立を背景とした個別サークルの矛盾

と、大況状的政治過程との関連性を実践上把握し切れたかった事である。

その必然的結果として、明大全共闘運動の一定程度の敗北局面において、活動家が戻つていったサークルは、以前と左程変わらぬサロンとして存在し続けたのであった。前述三点の総括において、サークル員としての主体的総括の基軸は(2)に求められるだろう。すなわち、自らが「敵権力と闘う」ということを、それは同時に、より多くの大衆と結びつくことであるという原則の欠如であったからである。この点は、過去サ連闘でやって来て、今わが文化サークル連絡会議に結集している一部学友の自己批判的総括でもある。

それは、あの政治的昂揚情況も影響しつつ、「やるか、やらないか」として、われわれ自身を規定していく、言いかえれば、「革命的状況」でもないのに、革命か反革命かどちらかである。そして、反革命足り得ない部分を一定反革命規定するという主徳主義に他ならなかつたのである。

それ由、根本的には帝国主義国家権力の弾圧と、それに抗して闘う人民大衆という敵対矛盾の構造があることを認しつつも、(2)は(3)との関連との中で語られねばならない。すなわち、サークル闘争委を結成する事 자체が

全ゆる虚飾と偽隠を解体すべく、あくなき闘いに決起せよ／わが明大文化サークル連絡会議に結集し、共に明日の文化運動の推進を目指そう！

## ★ 教育研究会

本校地区学館解放闘争は、すぐれて、明治におけるサークル運動の現状を投影した闘いとしてあるだろ。なぜなら、そこには闘うサークル主体のへ質▽が鋭く問われているからだ。すなわち、あの学館ロックアウトこそ

六十九一七〇年に至る我々の敗北の一つの象徴であり、そしてへ場▽を奪われた我々はどこへともなく隠散していった。(いや実は、否定されたはずの「サロン」へと、いつのまにか回帰していたのだが)そして今、再び、地の底からへ上がり「学館解放」を呼ぶ時、我々の依拠するものは何か、それはもはや、「学生自治の一環としての学館運動」などという薄い平な言葉では断じて闘い得ない。それこそ全共闘運動の過程で破産し、それ自身大学当局の「大学の自治」幻想の中に大きく包摂されいくシロモノでしかなかったではないか。学館解放闘争が我々の敗北への残骸▽を一つ一つ打ち破つていく闘いとしてあるならば、それは単に物理的に

サークル總体におけるイデオロギー的対立を背景とするからである。以上のように、國家権力、そしてそれに迎合する学校権力と、われわれとの敵対関係ということから発生したサークル矛盾、という事象を観る中でこそ、はじめてサークル闘争委の任務が設定されねばならなかつたのである。

以上の総括を踏まえる中、わが文化サークル連絡会議は、内部における思想闘争を重視しつつ、各々のサークルの矛盾を止揚する闘いを組まんとしている。それは同時に、サークル連絡会議に結集する学友が、自らの所属するサークルでの活動の核心的部分として存在する事を意味するのである。

「尚、もとより文化サークル結集体である以上、サークル連絡会議自体が「一つの文化運動体」として機能せねばならず、われわれは、われわれの運動論の一つとして文化運動を重要視するのである。

われわれは、「サークル存在」「サークル運動論」の共同追求の作業に新たな一步を踏み出したばかりである。その作業が発展していくに応じて、われわれはあらゆる手段を通して全ゆる学友・サークル員に提起して行くだろう。

全てのサークル員諸君／自己の全生活領域における、

岐轍を破壊するのみならず、過去の主体の側のへ残骸▽をもその中で破壊していかねばならない。そうであるならば現在的に我々に問われているのは、その破壊すべき我々のへ残骸▽の対象化の作業、具体的には、サークルの全共闘運動への関わり、そして「霧散」・「サロン」へと回帰していくその根柢的な総括であるだろう。我々はそれを断固として成し遂げる中で、新たなサークル運動のへ質▽を形成していくべきないと考える。

一、六〇年代教研総括と新たな視点に向けて

我々は六十九年四月合宿以降、「家永裁判」に代表される権利＝民主教育者的研究会運動としてあった六〇年代教研運動と誤別すべく、サークル再編の作業を取り組んできた。それは六十八年以降の全共闘運動とりわけ明大闘争の渦中ににおいてサークル闘争委員会を組織し、驟いに決起していったにもかかわらず、「サークル」という自己の存在基盤からの視点の欠落と、サークルの個別課題を一切抽象した形でア・ブリオリに「政治」を語っていたというその「ラグマ性故」に破産していった事実を踏まえるならば教研再編の軸は、「サークル論」と教研の個別性としての「教育論」の二者の中に設定しなければならなかつた。言うまでもなく、その二つは極め

めて有機的に結合しつつ、教研運動を規定していることは当然である。

1. 「大学におけるサークル存在とは何か」、この根底的なサークル存在の究明が、今まで諸々の形で語られた「サークル論」の中で一貫して欠落、あるいは不十分であった点であるだろう。それ故にサークル運動の過程で外化する矛盾を運営的・技術的次元でしか対応することが出来ず、矛盾の根源に迫得ることが出来なかつた。六十八年から始まる全共闘運動はこの様な技術的次元でのサークル運動、すなわち、「サークル」の存在を盲目的に前提とし、その上に「人間形成の場」・「学門研究の場」等の意味を与し、「サークル」を機能させていくという運動展開の不耗性を鮮明にした闘いとしてあつた。

大学における「サークル」は、「教室」における教育・研究の不十分性を補完すべく、より深化・専門性を求める問題意識所有者の自然発生的結合形態として、あるいは、「疎外」された人間・学生の共同性志向による場として発生・形成されてきた。(しかし、その中においても、自己をより高度な労働力商品として売りつけるための知縁の獲得というへ資本の論理)は貫徹されている。)

の後方拠点、あるいは、「活動家養成の場」としてしかサークル意味を見い出せなくなってしまった。ここにおける根底的な誤りは、第一点として、言うまでもなく「理論」と「実践」の問題を弁証法的に把える事が出来ず、兩者を分化し、短落的に「実践」を語ったこと、第二点として、その「実践」の内実が、「個」・「サークル」・「個別課題」とは無縁な所で行なわれ、××闘争へ結集することによって事足りるとする物でしかなく、従つてサークル運動が停滞しているか、推進しているかのバロメーターは××闘争に何人サークルから動員したかによって決定される。あるいは又、この「赤色サークル論」の単純な裏返しでしかないのが、「サークル限界性論」が我々教研も含めて六十七・六十八年の過程で論じられてきた。すなわち、一方における全国的な反戦闘争、学園闘争が高揚する中でサークル運動が相いも変わらず悪しきサークル主義から脱却出来ない現実をサークルの限界性として把えることによって無し崩し的にサークルの機能を停止させ、サークル員は自己の闘う場をC課委、学部闘委などの他の組織形態に求めて分散化していく。この様な「サークル」→「クラス」という問題設定は、「クラス」(大学教育)の矛盾の外化としてサークルが形成されるが故に、その矛盾の根源に向けて闘争を組んで

この様に、いつたんサークルが形成され自己運動を展開するや否や、サークル存在の根柢は全く忘れられ、する

サークル」⇒「大学」生活と結ばれる程までに、サークルの有益性が主張されてくる。一方大学当局も、サークルを「学生による自主的な教育研究の場」、悪いの場として位置付け、積極的に文運・合法体制に包摂し、場所的・経済的保障を成すことによつて、自らの矛盾を隠蔽せんとする。この様に、大学教育に対する反情況として定立しつつも、この過程で逆に「大学幻想」の中に

大きく包摂され、大学教育の神完物としての意味しか持つ得なくなるのである。すなわち、サークルは「学園幻象」から自然発生的に「疑似共同体」として登場し、そしてそれが制度化される事によって、内に含む反情的な意味をも喪失し、学生の自己満足的な「場」と化してしまう。

この現実を脱皮すべく、過去多くの「サークル論」論争が行なわれてきた。とりわけ、「研究体」か「運動体」かという論争は、サークルと社会総体との関わりを一切捨象し、「サロモン化」した中での研究会運動に一定程度の左翼的批判を行ないながらも、自らのその二元的な問題設定故に、「運動体」志向派は増え政治過程に落ち込むことによって「赤色サークル記」に純化し、「街頭」へ

いくという意味において一般的には正しいわけであるが、「サークル」から「クラス」に至る一面性、それは闘争が敗北し、その闘争組織も崩壊していく時点において、再び「サークル」に回帰して来た、という結果に端的に表われているよう単なるサークルの無力感から無内容に他の組織を求めていたにすぎず、サークル内矛盾の根底的な止揚ではなかった。

我々はこの様な、数々の「サークル」を取り巻く御都合主義と利用主義から今こそ脱皮しなければならない。我々教研はそれに向けた新たなサークル運動構築の環を全共闘運動の極めてラジカルなそのへ質の中にみていった。すなわち、近代學問・教育・研究体系解体と「加害者論」・「自己否定」はサークル主体にとって何を意味するのか、これに答えることが我々の唯一の突破口である。既に述べた如く、「大学幻想共同体」からの「疑似共同体」としてのサークルは、その研究内容 자체も近代学問体系からの疑似奪還でしかなく、「サークル」としての存在性そのものが大学教育を隠蔽し、大学幻想を自らが拡大再生産しているものに他ならない。この様に、サークルの存在性と内容性を確認するならば、我々にとつて「サークル」は否定的な代物でしかないことは明白であるだろう。そうであるならば單に我々はサークル

を解散・消滅しさえすればそれで済むのか、断じて否である。サークル存在を根底的に止揚することなく一時的存立せしめる世界への臨い、すなわち、近代公教育解体→学園解放に向けたサークルからの徹底的な闘いの中にそれを作成したところで又、次から次へと要無限的に同様なサークルが生み出されるであろう。ではサークル存在の根底的な止揚の道は何か、それは自己＝サークルを存立せしめる世界への臨い、すなわち、近代公教育解体→学園解放に向けたサークルからの徹底的な闘いの中にしか有り得ない。我々はサークルを「文化創造」の役割りを有するからと云つて一般的にその存在を容認することは出来ない。なぜなら、「文化創造」の主体がどこに位置し、何に向けてそれを為すかが問題となるからだ。その意味でサークルの個別課題に対する関わりも、体制内矛盾の外化、その隠蔽としてのサークル存在の止揚・解体の指向性の中には基本的には位置付けられるであろう。

我々は以上の様な視点を六十九年明大脚争の渦中ににおける教研の分散化→サークル闘争委の破産→ソロン化という過程を、存在論的に総括することによって「サークル解体論」として結実化してきたわけであるが、次に問題となつてくるのはその運動を成すサークル主体をいかに形成していくかである。それは先ず、一定の領域において問題意識所有者としてのサークル員個々がサークル運動の自然発生性を自らの内的な必然性として獲得出来る

かという「個」と「研究対象」の関係性の問題としてあるだろう。我々に即して言ふならば、「教育」に対する「問題意識」を単なる問題意識の次元に留まらせることなく、自己の生き方の中にいかにより深く所有し、貫徹していくか、もちろんそれはサークル員個々の決意性の問題一般に片付けられるものではなく、あくまで、我々の「教育」の内容とその実践過程を通じた他との緊張関係の中で形成される個々人の主体性の問題としてある。したがつて個々人の結合の環である「サークル」自身も「問題意識共有体」という次元からの飛躍が要請されているのであり、我々はそれを、自己にとって代替不能な「教育」を所有する人間同志の「共同体」といはば「教育」の第一歩が踏み出されるということを諸々の小化に抗し、再度確認しておくる必要があるだろう。

- 8 -

は「教育論」の確定、すなわち、権利教育論解体→マルクス主義教育論の深化をその課題として設定し、日共による「矢田教育差別事件」を具体的現実として抽出し、「矢田」という部落差別の現実に我々が思想的拠点を置くことにより、戦後民主主義＝憲法・教基法体制を対象化していく。すなわち、戦後教育理念としての憲法・教基法を基法の「永遠の真理」性故に国民教育運動がそこに絶対的価値を見出し、現実をそれへ接近する運動、あるいはそれの反動化に対して闘うという様に、憲法・教基法を当為概念として把え、「権利教育論」へのめり込んでしまった現実を踏まえるならば、我々の教育論構築の基点は唯物史観というマルクス主義の地平そのものでなければならぬ。

我々が「反帝教育論への試論」（創造二十一号）において、教育を「唯物史観と教育」・「政治と教育」の二元的領域としてみていくことにより、教育の永遠性に対して、教育の發生・分化・死滅の過程を明らかにしていったことは権利教育論への訣別宣言であると共に他の既成マルクス主義教育論とも決定的な区別性を持つものであつた。すなわち、教育を「唯物史観と教育」との關係でみると、上部構造としての教育は、それ自身自己運動はせず、社会の生産力－生産関係による盲目的な達

動に規定された下部→上部構造の史的変転の中に位置付けられ、原始共同体社会→階級社会→共産社会として人類史總体をみる唯物史観のスケールの中で、教育分業の発生（共同体における精神労働と肉体労働の分割）一分化（階級社会における教育分業の組織化）→死滅・共産社会における一際の分業の死滅）を明らかにすることであつた。しかし、上部構造としての教育は自立した自己運動を不得ない、う点において、教育分業の死滅の必然性は個別教育分野において論証し得ないところになると、それを解明するものとして「政治と教育」の問題が出てくる。それは教育分業の死滅へ向けて過度期としてのブルジョア私教育からゴレタリア私教育への移行の必然性は「政治」の問題として指定され、「プロセス」によるブルジョア私教育解体・再編として把え、社会主義＝共産主義の移行の過程で、ブルレタリア私教育は社会的階級へと成熟したブルレタリアートの「共同体」へと解体されていくものとして、ブルジョア私教育→ブルレタリア私教育→教育分業の死滅の全過程を明らかにしてきたのである。

我々は、六十年代教研の持っていた権利教育論への幻想性を再度「家永」を問題とすることによって明確に打ち破り、それが「矢田差別」を必然とする犯罪性を見抜

いていた。したがつて我々は、部落民、在日朝鮮人、等々という現代市民社会からも市民権を奪われ、最も抑圧されている人々を全ての解放の拠点におく地平を、教研教育論として獲得しなければならなかつた。しかし、それを「論」として獲得しえても、具体的実践段階でいなかにならぬかは、未だ「概念の域」を脱しえない、ただ、現在的に闘われている伝習館の「柳下村塾」あるいは八管闘争の過程で提起されてきている「地区運動」の中に我々が志向するその質が内包していることが確認できるし、その闘いに学んでいく必要があるだろう。

## 二、大新・学館解放闘争

我々は以上の如く、再編教研究創出に向けた理論的作業を行なってきた。しかし、この我々の論理と現実との矛盾を止揚していく道は具体的な大新・学館といった闘争に関わることなしには有り得ない。論理の発展もその運動過程の中でこそ獲ち取られるだろう。編集部処分白紙微回要求として開始された大新聞闘争に我々が関わっていった時点での位置付けは、中教審最終答申が提出されるという教育情勢の中で大新編集部に対する处分を、その中教審大学化を目指す学校当局（理事会）の我々に対する攻撃として把える一方、それまでの試行錯誤的な教

研運動の停滞状況を具体的な闘争を通じた学内諸戦線・サークルとの緊張関係を目的意識的に創り出していくことをよって打破しようとするものであった。その意味ではそれが以降の大新聞闘争を供に闘っていく中で教研の位置の相対化と、我々の不十分性、及び、任務を対象化する事が出来たと考える。すなわち、大新聞闘争処分微回から「新聞学会解体」へと深化・発展していく過程は、同時に「拡大M.U.P.共闘」として存在している我々が「読み手」の分断された関係を止場させていく過程でもあるが、現在的には「読み手」として存在している我々が「書き手」（編集部）と結合し、新たな表現運動をなさんとする時、不可避的に我々の運動が問われてくる。なぜなら運動を媒介しない一般的な両者の結合など全く無意味であり、商業新聞の方がより大衆性？を獲得しているではないか。

我々には「拡大M.U.P.共闘」に結集し、大新聞闘争の一翼を担うことによって、日常的に目で見、口にする「教育の帝國主義的再編」の一端を具体的な姿でみることが出来ただろうし、教研運動の徹底的展開の必要性を受けとめることが出来た。個別闘争としての大新聞闘争が全面的勝利のもとに終しつつある現在、その「新聞学会解体」の人質の中には「サークル解体」の普遍性を見出しつつ、自己の領域の中で自立した闘いを構築していくかね

-10-

ばならない。

六十九年明大闘争の敗北以降、大新聞闘争とともに、学内における唯一の大衆的闘いとしてある本校地区学館解放闘争は六・二九学館解放・周年闘争以来、数度に渡る鉄桿突破一ロックアウト粉碎の闘いとして学内の多くの諸戦線を結集して行なわれてきた。文字通り、全学生時間制ロックアウトは大学当局による、「大学の社会的役割」云々を口実にした学生個々の分断化・学内管理支配機構強化の策に他ならず、とりわけ、本校学館が神田地区という極めて政治性を持つ重要な場所に位置していることから国家権力＝大学当局の一体となつた学生支配の攻撃であることを踏まえておく必要があるだろう。それに対して我々の側があまりにも不十分であることがそれ以降の展開の中で明らかになっている。すなわち、六一七月段階での学館闘争は一時的に鉄桿を破壊し、学館内における集会を獲ち取りつつも、その時点からの自管理・運営という方針が何等具体的に提起されず、したがつて再び、当局のロックアウトを容易に許してしまつた。この様な主体の側の弱さはどこに起因するのか、とりわけ、学館運動の全面的担い手？であるはじのサークルが学館闘争においてほとんど姿を見せず、沈黙を守っているのは何を意味するのか、その間に答え、学館

闘争の内実を形成していく中に十一月における連続的な学館闘争、そして再々度の当局によるロックアウト策動を許さず恒常的には使用を獲ち取つていった鍵があった。学館とは大学当局がいみじくも言つてゐる様に「厚生福祉の場」・「憩いの場」でしかない。しかし問題なのは、何に対しても「厚生福祉」・「憩いの場」であるかなのだ。まさしく、教育矛盾の隠蔽、疎外された学生（その集団としてのサークル）の収容所、つまりは「大学教育、学生支配の補完物として学館は存在する。六十九年明大闘争の敗北＝全学ロックアウトの過程でサークル運動が全く停滞してしまった事は、我々がそれに規定された運動、すなわち、大学当局による「学館」という経済的な保障の中では運動を展開することが出来なかつたという、我々自身の件の狭さを先ず総括しておく必要があるだろう。そうでないならば、学館闘争を「場の奪還」という意味性しか持つことが出来ず、そればかりか、当局によつて学館に替わる場（例えば四号館）を与えられた時、我々は本質を見失い沈黙せざるを得ないだろう。教研は以上のような視点を踏まえ、学館闘争を管理、支配秩序粉碎＝学園解放の闘いとして、又、一方においては諸戦線・サークルとの落合を追求し、両者の主体形成を極め取つていくものとして闘い抜いてきた（文サ連の

-11-

組織化）。我々にとつて学館運動とは、自らの主体の形成と、それを不斷に他者に働きかける実践過程に他ならず、最終的には学館が「学館」として存在する現況の変革である。より具体的に言うならば、サークル解体に向けた全面的な教研運動による公教育制度そのものの解体に他ならない。

我々はこの様な、大新一学館という具体的な学内矛盾に対する醒いに関わり合うなかで教研の混迷状況を一定程度突破出来たと考える。すなわち、諸闘争の一翼を担うことによって逆規定的に要請される我々の任務が何であり、どこに向けて闘いを構築していかねばならないかが極めて鮮明化してきた。それは我々が數度試みつても、そのたびに不十分性故に破産し、貫徹することが出来なかつた「教職闘争」の中にこそ、最も自己の個別性を開拓することが出来、我々が教研の方向性として獲得してきた「サークル解体論」と「反帝教育論」のその一論としての限界性を止揚することが出来る闘いとして我々に課せられていることを導き出すことができた。

(文責・Y.)

### 三、教職闘争

十月五日の教育原理（三木寿雄文学部教授担当）にお

の中で「解体」の内実が真に克ちとられていくのではないか。それへの試行として教職闘争を今現在展開しているわけである。

我々教育研究会は昨年以降、現在の教育情況の分析における立場性の明確化等を断続的にではあったが和泉における教職課程に対するビラ入れを行つて来た。さらにまた、当横國大講師の五十嵐氏を呼んで「公教育制度の解体と反敵派教師」と題する講演会などを行つて来たわけであるが、以上のような作業は自らの立場性のみを語るだけで自己完結的なものに終始していたにすぎなかつた。我々はそういつた運動の脆弱性を十二分に知り尽くしたが故に、まさにそれを打ち破るものとして、同時に自らの教育観・教師観を孤立させないためにも授業介入という手段に出たわけである。

我々の最初の問題提起は至極簡単なものであった。第一点として「授業のとき、部屋にカギをかけるのはおかしいのではないか」第二点として「写真を貼りつけた出席表に毎回列をつくってハンコをもらうとはいつてどうのような意味を持っているのか」等の三木教授の授業形態であり、第三点として、主要に三木教授があたかも教條的に講義で取り上げ、問題とする憲法・教基法の理念の現況下における存在的価値性を我々が三木教授に

ける教研の一学者の発言に端を発した教職闘争は、自らの行方を彷徨つつ、今現在の野火の如く熱のように燃え広がるとしている。

我々が教育原理の時間に授業介入・問題提起をするに当つての基本的な軸として、七十年以降主要に我々が問題としてきた教研の「サークル解体論」構築・実践化の過程にそれがあるのだということをまずもつて踏まえておく必要がある。これに関しては別稿で詳細に述べてあるのでここでは簡単にふれておくと、要するに六十九年における明大闘争－全共闘運動の渦中においては、「サークル解体」がストレートに語られ、即政治的にクラスへ、○○闘争委へとサークルそのものがヒヨリミ学生をも産み出した形で分化一分裂していった。このことを徹底的に総括する中から、体制内化・無力化＝無内容化した現在の大学のカリキュラム＝講義から、学問的的行為の内実化と、学生相互の人間的なつながりを求めて個別の問題意識のもとに諸個人が結集してきたサークルを、それが学校教育の補完物に転化され、無内容化しているそれの不満のけ口として機能している故に解体するという方向性で位置づけるならば、その個別性を徹底的に追求し、その個別の領域から再度それを踏まえた問題のとらえ返しをしていく必要があり、その過程

問うものとしてあった。

以上の問題提起を追求していく過程の中で、三木教授と対戦闘節の我々の知つたところの「交替劇」があつたり、三木教授が事実上一ヶ月近くの「行方不明」となつたり等に明らかになったごとく、六十九年当時の大衆団交や大新闘争の過程における授業介入よりもより身近なものとして、教授と呼ばれる人間がいかに手前かつて臨機応変に我々に対応してくるということを感じたわけであるが、主要に我々の追求は教授のそうしたギマン性を暴き出すことではなく、我々諸個人と教職課程履修の学生諸個人との間に様々な関係を創り出していくことである。一方において、その展開を図る過程で、現在の「差別・選別」をその軸とした公教育体系秩序をいかに実体的に解体していくのかを統的に追求し物質化していくことである。

教職闘争の現段階は、我々の提起である「出席表」の破棄と「カギ」はかけないといふこの2点の確約と、三木教授の一ヶ月にも渡る「行方不明」等にみられる我々に対する無責任性、あいまい性の自己批判をいちおう勝ち取つたわけであるが、これから我々のなすべきことは、一方において、対三木教授、あるいは他の教職課程担当の教師達との教育に関する論争を徹底的に展開しつつ、他方においてそれに裏づけされた教育の実践化を物質化

していくこととしてあるだろう。主要には今現在さし迫った事象として単位認定・評価の問題があり、それそのものが現行の差別・選別を産み出す公教育を支えるものとしてのみ存在することを認知するならば、まさしくそれは粉碎の対象以外の何物でもない。より具体的に語れば、△教育者—被教育者▽へ指導者—被指導者▽の関係性の相互止揚をその第一義的なものとするのが本来的な教育であると規定する故に、最初から単位一良い評価を得ることがあるが、自己目的的位置づけられていれば、△教育者—被教育者▽へ指導者—被指導者▽の関係性を削り出す時間・空間をも奪われ、そこにおいては当然諸個人のもつ全的議論能力の発展・発達などはから取られるはずもなく、まずもってそういった現行の単位制度を問題とする必要があるだろう。現在の公教育体系下においては、人間諸個人の人間的な関係を削り出す時間・空間をも奪われ、そこにおいては

やるんとしているのか。それは、まずもって三木教授が、教育原理履修の全ての学生に単位を与え一律的に評価することを公言するようになっていくことである。現在の教師の位置関係は、生徒一学生の前に単位認定権所有者△権力者として登上し、単位の認定をしているということで現在の公教育を根底から支える役目を負うところに存する。その教師がいかにして本来的な教育を達成し得

ていかねばならないと考える。

(文責・J)

## ★社会思想研究会

### ① サークルの現状

我々、社会思想研究会は、昨年度、実質上崩壊し、サークル活動も一切行なわれていなかつたという状態だった。しかしながら、再度新たな視点からサークルに闇りつつ、サークル運動の創造へ向けて、今年の4月から活動を始めたのである。その意味から言っても、我々のサークルは人數が少なく、内容性を探める上では非常に最適なのだが、その反面サークル内に閉じ込める傾向、階級主義的傾向が顕著にならざるを得ないという欠点がある。我々サークルは、研究課題が、社会思想という、非常に漠然とした、範囲の広いものであるため、活動内容においても具体性に欠け、実践活動との結合がスムーズにいかないという困難な問題をかかえている。サークル内の討論においても、常に問題となってくるのは、研究活動と具体的実践の連携であり、4月からの活動の過程においても限界に突きあたるを得なくなつた。限界とは研究内容を現実的な関係性の中に、どのように対

るかは自らを被害者としてのみ位置づけるのではなくしてまさに生徒一学生さらにまた労働力の再生産過程を担っているということにおいて社会総体に対し加害者のものとして存在していることを認識し、そういうた自己を不斷に追求していくことにあるだろう。そのような意味において三木教授自らが自己の立場性にもとづいて単位認定権を放棄し空洞化する行為を実践する必要があるだろうし、それがまさしく三木先生の教育原理における本来的な教育を追求しようとするならば、まずもって單位認定権を放棄し空洞化する行為を実践すると考える。しかし我々の提起である一律全般に対し、現在、文学部教授会や他の教職課程の教授や講師から三木教授に対して「単位認定権は教授会にある。学生のイニシアチブにて全員に権力を与えることはとんでもない。もしそんなことがあつたら君には大学をやめてもらう」旨の洞力ツがかけられてきている。学生のイニシアチブになつた教授会の提案した内容性を一切踏まえない形で強制的に洞力ツをしてくる教授会一学校当局に対し、そういった単位認定権をふりかざした洞力ツこそ現在の大学教育を無内容化し、学生の創造性をつみとり無氣力化していくくなつたものでもないと認知する故に、断固とした反撃を開始したい。

(2) 我々にとってサークルとは(社思研の方向)

ここではサークル全体というものではなく個人的な見解に終つてしまつたが、「我々にとってサークルとは何か」という事を若干述べていきたい。現在の大学の中におけるサークルの存在意義そのものが、マスプロ化し、技術化している大学の授業からの逃避の場としての意味しか

持ち得てないこと、そして大学がサークルを公認し、援助することにより大学管理支配機構の補完物としての役割しか果たさないものになっている。それ故にサークル活動の内容が「いかに楽しい大学生活を送るのか」という事に収納されてしまうのである。サークル運動のこのような状況を突破するためには、サークルに関わる者が大学の中におけるサークルの存在の意味、そして社会全体、サークル内における個々人の関係性を対象化していくことである。そして大学の管理支配機構の補完物としての役割しか果たさない「既成サークル」を解体し、サークルに関する諸個人の関係性の立場を、具体的実践を媒介として獲得することであり、サークルの「共同性」の意味を追求していくことである。そして「既成サークル」の解体が、大学支配機構の補完物としてのサークルを拒否することであるが故に、それは大学解体→資本制社会解体へと向う実践的運動の中で表現されねばならず、また我々の新たなサークルのイメージもその中から登場していくだろう。そういうた運動の過程の中に現在語られ尽された「サークルの混沌と低落」という情況を打ち破る契機が一面的にあれ、存在していると思う。

### ③ 学館問題への視点 一貫的限界性、欠落性、

題に終始しているのである。学生会館ロックアウトは七十年代教育再編として進行している大学の管理支配化と大学院大学構想、築波研究園都市構想に見られる産学協同へのより一層の追従などの個別明治におけるその具体的な表われである。中教審大学化への道を歩む、そのステップ・ストーンとして全学ロックアウト体制―学館ロックアウトがある。そして、その事は明大のロックアウト体制として抱えるだけでは決定的に不十分であり、神田地区一帯、日大、中大などを含めた治安体制の問題として抱えねばならない。それ故に、学館実力解放→神田治安体制解体の斗いとして、この間の学館解放斗争が斗われていたと思う。我々が、学館解放斗争に関する場合に、踏えなければならない事は、個別のサークルにおける運動を深化させる中から学館解放斗争に関わっていくのであり、短絡的な政治過程への流れ込みは拒否しなくてはならない。そうでない限り、六九年明大斗争の時にサークルから突出した部分がありつつも敗北の後運動がなくなってしまうという状況を乗り越える事ができないだろう。我々は学館斗争に限る中から、分化化されているサークルの枠を突破し、サークル内の個々人の関係性、他サークルとの関係性、大学総体との関係性を変革していかねばならない。そして、そのような運動を

現的に学館問題が我々サークル員にとっては主要な問題になっている。学生会館とは何か？それは大学当局が主張するような「憩の場」でもなく、「厚生福祉の場」でもない。そのような学館は大学の管理支配機構の補完物以外の何物でもなく、我々の解体の対象である「既成サークル」を強化し、サークル運動を管理された体制の中に押し込めるものでしかない。我々の運動が新たなサークル運動を創造していくものならば、学生会館は我々の運動を保証しそれを発展させていく場として位置づければならないだろう。それ故にサークル解体運動の中で当局の「学館」を解体し、我々の「学館」を創っていくなければならない。本校学館は、六十九年十月九日大学院徹底抗戦以来、警察権力と一体となった大學当局の中教審大学化への道を、より強固に打ち固めんとする、その踏石としてロックアウト攻撃がかけられ、我々の力量不足もあって、今年の六月二十九日まで鉄柵とベニヤで封鎖されていたのである。大学当局のロックアウトの理由は何なのか？それはこの間の学生部との団交の席上でも明らかになっているように、「社会的責任」あるいは過激派の拠点になる。「学館特別委員会の選出過程が明らかでない。民主的にやらねば……。」という形で問題の本質を一切語ることなく、現象的な問題を保証していくものとして、サークル連絡会議の存在意識があると思う。我々社会思想研究会は、サークル運動の革命的復権に向けて斗っていくことを最後に述べておきたい。

### 理論社会学研究部

(文責ニヤロメ)

まず初めに、我々理論社会学研究部（以下理社研と呼ぶ）がどういう過程をもって社会学部研究部（以下社研と呼ぶ）から分派してきたのかを略記し、我々がどういう意識で理社研を造ってきたのか、我々はそこで何をやろうとしているのかを書いてみたい。

60年後半より70年安保改定が政治日程として登り、全国学園闘争が激化していく中で個別社研内において反乱の狼煙を上げる者が続出する様になった。しかしその狼煙をあげた者の大部分は、一定程度社研の研究体制を批判しつつも、意識ある主体が個別に参加するというその全共闘運動の特質ゆえに、サークルを離れ全共闘に突入していくなかで、意識ない主体ばかりが残った社研は、あいも変わらず調査ばかりしているサロン的サークルとして存続し続けてきたのである。そして明大闘争が一定の

○○をもって終り、全共闘に参加していた個人がある者は「くずれ」として生きてゆき、またある者は戻る所が他にないという存在性ゆえに再びサークルに戻つてくる内で、社研においてはやっと本格的な組織的な解体のための仕事が始められたのである。そして学内においても日常的ロ・タ・アワット体制がしかれ、安保、沖縄と政治課題が山積している内で、それら学内外の状況に何ら対応出来ない、むしろ抑圧してくる社会学とは一体何であり、またそういう研究の体質はどこから出てくるのかという問い合わせを社研総体に対して成しつつ、理社研三年生を核とした部分が和泉学館解放、安保を戦ってきたのであった。七〇年度における対幹研闘争は、五月和泉祭をバオとして新入生を巻き込んだ形で展開された。再三幹事会から出される除名策動に抗議しつつ、幹事会の行なう夏季実態調査合宿に対して別個に理論合宿を行なうという形で造反派は自らを明確にさせてきた。そして後期に入り理論合宿報告書を提示する内から再度問題を提起していくのであるが、造反派内部の個々の主体の問題性のために、積極的な社研総体との緊張関係が創り出せず造反派は分解し、以後社研内部において雑誌による分派活動を続けていくことになった。暗い冬の時代が過ぎ、七一年度新入生が入ってくる内で、

の存在を見つめ直してみた時、社研という集団を存在させている状況からあまり解放されていない私というものを認識するのであった。

社研においては半月間にもおよぶ夏季実態調査合宿をメルクマールとした一年間の活動に、大学教育の矛盾から逃避した形で、自己を没主従的に同化させてゆく。既製の大学教育から疎外された者達が没主従的に、なかよくクラブ的に造っているのが、あいも変わらず大学におけるサークルの現状であろう。そしてそこにおける研究対象はどのように設定されるかと言えば、主体と社会との緊張関係からの問題意識によるものではなく、趣味的な興味から、あるいは大学教育の補完物としての美学的なものが多い。また趣味的な研究を目的とするサークルにおいても、「一方にはその研究に全部をそそき込んで没頭していく部分と、他方には『いいこの場』としての『楽しいサークル活動』にアカデミックな雰囲気をただよわせるための道具としてしか研究を対象化出来ない部分とに両極分解していく。

社研のサークル活動における四年間といふ時間は、一年生の時にかえもった社会に対する問題意識、あるいは社研に対する疑問が殺され、転向をせまられていく過程である。そして最終的に卒業する時点においては、

再び社研の体質及び研究活動に不満を持つ部分が彼らの内に生まれてくるのである。造反派は過去幾度も味わってきた社研革命の幻想を若々しくかみしめながら、六月ついに社研を批判しつつやめていった新入生と共にゼミ活動を始め準備合宿、十月の理論合宿を経て正式に理論社会科学研究部として公けの場に登場し、公然たる対社研闘争及び新しい我々の社会科学研究活動を始めたのであった。

以上簡単に理社研成立過程を述べてきたのであるが次に個人の発言を引用しながら我々が理社研を造ってきたその問題意識を語ってゆきたい。

造反派の分解過程において社研を去つていった部分においては、『社研には縁切状を出してきた』『私はこれからはもう、ああいうサークルからは解放されて生きてゆくんだ』という意識があった。また新入生の中で批判しつつやめてきた部分では『あん度しがたいサークルなどに属しているのさえ私にとってはマイナスだ』といふ面もあった。いずれも社研をやめてきた時点においては、『これからは私のやりたいことは、この解放された空間でおもいつきりやることが出来るのだ』という意識があつたのである。しかし我々理社研に属している者達の共同関係の原点を確認する意味で再度社研というもの

うまく社会に順応してゆける、卑俗な意味での社会科学を身につけた人間を再生産していく過程でもあるのである。これは一般社会において、造反していた者が管理職になると逆に抑圧者として登場していくという構造が、この大学サークル内において縮小された形において現出しているのだということであろう。

サークル内部において何を媒介としてサークル員同士が共同関係を結ぶかと言えば、それは単に半月間の合宿あるいは四年間をいっしょに過してきた仲間であるという意識でしか結びついていない。それは『自立』した自己を明確にしたうえでの共同関係ではなく、あいまいななれあい的な関係でしかないのである。

それでは私の社会科学研究、及びサークルはどういうものであるのか。『私』から発した社会科学とは、社会との緊張関係から私自身を明確にしていくなかで、私と社会との関係の間にどういう問題があるのかを認識し、その変革の道を探り出していくものなのである。言いかえれば、私の住んでいるこの社会を何々社会、何々社会といつた形で切つていくのではなく、また単に政治闘争という形で自己を社会化させていくのではなく、社会を人間生活の共同という視点から考察していくという社会科学の基本的視点をもつてして、私の生活と社会を各々両極に

置き、互いにその極に致るまでの関係性を連続的に捉え、兩極を断絶せぬままに、その総体を変革していくのだということであろう。このことを私の基本的視点とし、そのための必要な社会学理論を模索していくということになるのである。それは単に、彼らの社会学に対して、マルクス社会学を対置させるというようなアンチテーゼで終るのではなく、社研を自己の生活から告発し、我が内なる社研というものを見つめ続ける中から、我々の運動は始まっているのであると考えられる。

## 2

## 社会学批判序説

ソ連の「ディクトーラ」が、その歴史的限定性の中で？かつてはスターリン專制を生み、且つ又、最近、チエコ侵入事件を生じさせた今日、或る者は構造機能分析の正統性に笑みを浮かべ、社会学の大進撃を宣言した。「構造機能的考察」ファシズムもコミュニケーションも独裁である。」と

「普遍的価値より、経済的事実の概念化が必要である。」と  
社会学に対して、例外的現象、非時間的空間的現象を強

的に「欲求の体系」とか理性的なものと現実的なものと一致として捉えるのではなく、且つ又、市民社会の現実を分析することによって、資本主義社会から社会主義への移行を科学的に考察する中から社会学となる社会を基礎づけようとしている。

そうして日本においても権俊雄を筆頭に日本のお嬢々が、既成社会学を「ブルジョア社会学」という言葉で切り捨て、マルクス主義社会学＝史的唯物論の國式的定立を日々図りつつある。確かにいわゆるマルクス主義社会学は、その「社会」を歴史的に把握し、それを基礎としている点では、頭のある社見学であると言えよう。

然しながら、頭より普遍的認識のみに終止し、一般的、

普遍的認識を個別化的認識によって基礎づけ、逆に後者が前者によって導かれるという相互関係（交通関係）を

定立しえない限りマルクス主義社会学は、ブルジョア社会のアンチーゼでしかも、ソビエト御用社会学の域を一步も踏み出さないであろう。

我々は日共であるとか、ソビエト社会学」という理由に於いて指摘しているのは決して無く、マルクス主義社会学＝史的唯物論という定立が、絶対不動の物ではなく、「己」を始め、絶対も含め、マルクス主義それ自体が

調する中で、社会生物学と社会解剖学の統一としての社会科学（あるいは機能と構造の相關の論理としての社会学）を對峙させ、その優位性を、かつてはデュルケム学派－今日的には、バーリンズ等によって力説されている。社会学は、パーソナリティー、集団、文化の理論と誠に抽象的、並列的且つ又統計学的アプローチなるが故に、一見社会総体を網羅しているかの如く思えるが、実はその根本である。社会の成立過程、社会の本質的規定が全く欠落している事に気づくのである。

確かに進化論の影響下にあって、頭のない社会発展段階論は、コントの神学的、形而上学的、実証的「三段階の法則」として、スベンサーの「軍事型社会から産業型社会へ」デュルケムの「機械的連帯から有機的連帯へ」テンニエスの「ゲマンシャフトからゲゼルシャフト」として國式的に語られつつあるがそれは最終的には、創世紀の世界つまり「はじめに神は天地とを創造された」という社会発展論でしか有りえないということを指摘したい。

このような社会学に対して、ソ連、東欧を中心にして、「マルクス主義社会学」の勃興がある。社会を創世紀的に捉える既成社会学に対して、社会を「市民社会」として歴史的過程の中で捉えるうえ、（市民社会を）ハーゲル

たえず根源的な問いを自ら投げかけているという観点からである。

歴史的唯物論を、生産力、生産關係と國式的に解釈する「ドイツイデオロギー」に読みとれる如く、あくまで協働に媒介される一定の生産に条件づけられた交通及び交通關係を、普通的認識と個別の認識の相互關係の中で明確に位置づけ、その指向性の内で社会学を追求しなければならないと思われる。

## 3

## 新たなるサークル運動に向けて

序にならぬ序

-21-

社会学研究部造反派へ我々から→我々への過程を指向する中で一つの集団（理論社会学研究部）は、現在的に何をし始めているのであるか、又々我々から我々への過程で何を見詰め、何を為してゆかなければならぬのであるか。  
一九六〇年九月の学園闘争の発端は、學問を職業とする教官が、日頃教壇で、「大学は理性的の府である」とか、「大学に於ける議論、研究、決定は正確な事實認識に基

づいて行なわれなければならない」と口先きでは言ないながら、疑わしい処分や、經理の亂脈を遂行し、事實を全く隠蔽する中から、自らの立場、權威を利用して、弾圧して来た事に有ると思う。

その禍中にあって、理性の府とか民主主義の確立といった、幻想を自らの手で、或るいは、權力＝機動隊の手を借りて、崩壊させていった。

そしてその過程で、自らの存在、を問う事無しに、自己満足的に、「大学改革＝近代化路線」でお茶を濁し、授業再開へと充塞して行った。

授業再開へと充塞して行った。

その上、今日的には、二度目の否三度目の民主主義を以って、授業料値上げを宣言せしめている。

では「へ我々は／自分の研究している事は何になるのか」を、その発端に問いつも、大学当局とその深部総体である國家權力を糾弾して行つた。そしてサ連斗へと、全共斗へと、階級斗争の枠を拡大していった。

その出発を、自己と総体との相互関係性としながらも、ヘルメットという媒介物を以つて、その形の同質性の中で、へ我々の中の己が不明確化していく。そしてへ我々らしき一團として一方通行的的に、へ我々の中の己れを知る事無しに）大学に、權力に攻撃を加えた。そしてへ我々が斗争の中で、普遍という名の拡大の

へ我々から我々へ

社会学研究部を批判し、我々の方向性が思考されてい

る今日、その対象は始ず、教授の中にいるへ私V、家族

にいるへ私V、サロン的サークルにいるへ私Vと、それ

らを批判し、糾弾して来た私との矛盾でなければならぬ

かーを、己れ自身に、問ひ、「反逆の根源」を再度深く

争に集約していった。

己れの關係性を總体の中に喪失し、スケジュール的多忙

の中で、自主講座を潰し自らの關係性の中で始めて得ら

れる文化創造を「もとと闘うのだ」という闘争の為の闘

争に尋ねる必要があるのではないだろうか。

己れを欠落した社会意識は、一方に学たる学としての

## 「現代の事としての 宗教批判」序説

「たはごと

16.5

大學教授を、一方には斗いの為の斗いとしての政治革命主義者＝スターインしか生み出さない。

文化創造の実態とは、あらゆる反逆の思想形態を、あくまで下部構造から発せられる生活意識を通して、政治＝イデオロギーを逆手に取り、ホンネとタテマエとの矛盾を、表現実践してゆくものではないのだろうか。

かつてのブローラリア文学運動が、強圧強化の中で、一方に大東亜共栄圈拡大を大衆への同化を以つて協力し、或いは、社会意識のみを貫徹せんが為に、論理化されざる己れの内面世界を政治イデオロギーで飾り、親子も含む大衆そのものを切斷して迄、自らを「前衛意識」そのものに凝り固めていたという、一度目の悲劇として演ぜぬよう我々は、学館自主管理の運動を、自らに問いつ進めてゆきたい。

てきた明大三地区パリケード・ストライキの闘いを、その問題提起に一切答えることなく國家權力の合法的暴力装置、機動隊によつて虐殺し、大学院徹底抗戦を果敢に闘い抜いた七名の学友を大に売り渡すなかから、全学ロックアウトをなくしていった。十一月の授業再開以後、全学ロックアウト体制就中学館ロックアウトの中で、我々は今ようやく生田、和泉、駿河台地区の学館を次々と実力で解放し自主的に管理している。又、この学館自主管理Mの質的深化拡大こそが学館解放委、文化サークル連絡会議の現在負つてゐる一つの重要な課題である。

ところで少なくとも六九年以降の明Yの状況を振替つてみると（私がYMCに入つたのは七〇年五月だった）ので六九年の明Yの活動状況は直接的には知らないが）五月／六月の和泉祭における展示内容からしておよその見当はつた。つまり明Yは六九ト七〇年の和泉祭まで対外的に主としてへ靖国神社国家護持法案V反対をアピールしてきたのだが、その内容把握たるや全くのお粗末としか言いようがないほどのものであった。つまりへ靖国神社国家護持法案Vは憲法に保障されたへ信教の自由Vに違反し、又へ政教分離の原則Vに違反し、ひいては日本軍國主義化の基軸になるからイケナイのだと表面的に言いつつも、根本的には単なる宗教的エゴイズムか

からの反撃でしかなかったのだ。だから人々から「八靖國法案」でなく「キリスト教国家護持法案」だった、あなたがたキリスト教信者はどうするのですか?」と聞かれて、グーの音も出ないのである。しかも犯罪的なことは、八靖國法案が何処から出てきて、何を目指しているのかという本質的問題を廻り返す作業を為し切れず、反対運動の過程で日共路線に安易に埋没しているということである。もし、その作業をやり抜くなら当然現

在の入管体制更には入管法、部落差別、在日中朝アジア人民に対する排外主義、沖縄等々の問題と根本において共通項を見出し、何らかの形で共闘したはずであり、八宗教としての天皇制もしくは天皇制の宗教的側面を如何に無化するかという間に肉迫し始めたはずである。

あるいは、「私はキリストを信ずるから、私の国籍は天国にあり、したがってこの世を旅人として過ごす。だから旅の恥はかきすてだ。」などという説弁を奔して何ら省みないのであった。

こんな調子だから、当然六九年一〇・九以降特に駿河台地区の学館ロックアウトに対しても何らかの対応を為すだけのサークルとしての質を持ちあわせえなかつた。たまたま、明Yの本校部室がロックアウトされた学館内

には無く、他の建物にあったため、サロモン化した無内容な活動が日常的に行なわれ、七〇年度駿河台祭にも何の位置づけも無く、無批判に参加していく。

現在の四年生部員に対して、私からの訴えとして、ロ

ックアウト体制を個別明大のこととして抱えてはいけないことをはっきりと見てとらねばならない。こうし

て帝國主義的ヘゲモニーを大学という、市民社会における諸矛盾の突出部において確立するためにロックアウト

々の闘争を弾圧する為にロックアウト攻撃をかけてきた

いこと、例えば七〇年六・一八・二三におけるロックアウトにおいて、國家権力と癒着した大学当局が、政府中枢地区に存在する大学をロックアウトすることにより我

攻撃が存在する以上、我々サークルはロックアウト粉碎の闘いを、権力のヘゲモニーを具体的につぶしていく闘いとして担い切らねばならないということを再三再四訴えていたにもかかわらず、それから一切無視し、多数決の原理で押し切っていく中から、反共イデオロギーとしてのキリスト教をがなりたてる、KGK(キリスト者学生会) JCC(ジャパン・キャンパス・クルセード) ナビゲーターの隠れ蓑として存在する明大聖書研究会なる破廉恥きわまりない組織と手を組み、七〇年度駿河台祭には、その反動的牧師を呼んで伝道集会などを開催し

ていったのであった。現在四年生になる部員達や聖書研究会の奴等には、一九七〇年、大阪で開催された万博の意味などはおよそ理解しえず、ましてや日本の一部キリスト教界が参加したことの犯罪性など全く判らないらしい。(ただ言えることは、学館ロックアウト問題を抜きにして白々しく部室を使えるよう精神構造を持つためには、どうすればよいのか?)ということである。

こうした中から我々は、彼ら騎馬でカマトドで救いようがない、明Yの四年生部分(『欺瞞的犯罪的擬似キリスト教信者』)を放逐し、民青部分を放逐していく脚力を展開し、自らを「闘うキリスト者」へと、更には宗教批判の担い手へと前進させてきている。(マスコミにおいては「キリスト教界内造反派」として本質的事柄は一切報道されないままにかたづけられているが。)なお、我々が放逐した一部が聖書研究会なる欺瞞的犯罪的擬似キリスト教信者の群れに逃亡したことである。

さて、ここからは我々が為そうとしている宗教(キリスト教)批判が、宗教を持つていない人間においてすら如何に他人事でないかを述べてみたいと思います。

宗教批判などと言ひだすと、何を今更とんちんかんな事を言つてゐるのか、とか「俺は○○教を信仰しているわけでもないし、社会科学をやつてゐるから、宗教とか観念

(論)のことは処理してあるんだ。」というように言わ

れるかもしれない。又、キリスト教なんていうものは自然科学の発達等によって、とっくの昔に克服されたものだし、今だに信じてる奴等は前近代の骨董品みたいなもので眺めて厭がなければ、まともに相手にする気はないよ、ましてやそこはヨーロッパじゃなくて日本なのだか

らと言われるかもしれない。

確かに近代市民社会における宗教(キリスト教)批判はマルクスの作業で本質的に終ったのである。だが彼以後のマルクス・エピゴーネン達が彼の思想をどれだけ実質化し、貫徹してきたのかという問いを発する時、その答は否定的にならざるを得ない。何故なら、例えば一九五〇・六〇年代にもなって西欧マルクシストの一部が、自らがかかえもった左翼教条主義の解決をキリスト教の「超越」概念へと求めて「マルクス主義者とキリスト者の対話」なんぞという白けきったことを平氣でやつているのである。又、日本においても最近体系的にキリスト教批判をやつたと思われるマルクス経済学者、平田清明の問題があるのである。(詳細は、平田清明「市民社会と社会主義」六九年刊、岩波書店。田川建三「批判の主体の形成」所収「平田清明批判」七年刊、三一書房)彼

されて全国的に講演して回ったマルクシストであるが、由川建三氏の彼に対する批判によって、その著作におけるマルクスを基礎としたキリスト教批判のお粗末さ、データラメさから、彼自身のマルクス理解そのものを疑問視せざるをえないところに至っている。所詮専門バカは専門バカでしかないこと、しかも専門領域それ自身の内容まで疑わざるをえないところに至っている。

したがって既にマルクスにおいて本質的には終つてゐるマルクス社会の批判も、現実的に我々がこの社会を止場しきるまでは、その批判をやめるわけにはいかない。よう、我々はそれに伴なう一作業としての宗教批判を止めるわけにいかない。ましてやマルクス・エビゴーネン達が現実にこの様な有り様である以上我々はキリスト者は更に何度でも宗教批判のイロハを繰り返して言わねばならない。

更には、一般的に言えることなのだが何かしらキリスト教的雰囲気をちらちらさせられると、それに対してはつきりと否であるとか、ダメなのだと言いきれないそういった心的空間を日本人は持ちあわせているように思える。

例えば、文学の世界においても遠藤周作の描き出すキリスト教の論理には、とかく足をすくわれがちである。

とは困難であると言えるし、基本的に思想が思想であるためには大衆の原像を通過していなければ意味をなさないことを認識していないことになるだろう。

ここで一つ言えることは遠藤周作は体制内だから駄目だと言う言い方、つまり作家や（思想家）を政治的に右か左かで、こっちは駄目であのこっちは秀れているという批評の仕方はおよそ低次元であるということである。

彼の様にキリスト教を徹底して文学の世界で追及していくのではなくて、安手のキリスト教的雰囲気を売り物にしている連中がいるが、その中の代表人物として某ブル新に「永点」を連載して売れっ子になった三浦綾子の場合には文学的といつても、お嬢様小説の域を出ないシリモノしか書けないし、ただキリスト教の神念を作品のそこそこちやらちやらさせるだけで文学的にキリスト教を追及するだけのことを為し切れていないから、あえて問題にしないとしても、そういったものでは一般的には好まれるといふことが一体どういうことなのかを追及する必要性があるということだけを言っておきたい。

私の基本的に言いたい事は、宗教を否定してきた人々が、権力を支えるものとしての宗教と大衆が宗教に向かう動機との区別を明確にさせていないということである。だから後者の問題を欠落させたままいくら宗教をアウ

その論理とは、簡単に言つてしまえば「沈黙」のころびバテレン、ロドリゴや戯曲「薔薇の館」の宣教師ウツナソの様に、人間というものは不完全なものだ、ダメなんだとということを徹底して最後まで言つていく（途中で、だから彼のキリスト教的文学では、宗教的な「罪」概念を通俗的に人間というものは本質的に弱い、ダメであるし、最終的にそれでいいのだと肯定してくれるものとしてのキリスト像（作品の主人公）を描き出していく。だといふという弱者が逆に強者となつていく論理である。だから彼のキリスト教的文学では、宗教的な「罪」概念を通俗的に人間というものは本質的に弱い、ダメであるし、最終的にそれでいいのだと肯定してくれるものとしてのキリスト像（作品の主人公）を描き出していく。だといふという弱者が逆に強者となつていく論理である。自己の感性と思想との関係が日常的にどうなければならぬのかを追及しなければならない。確かに鬱い統計でいる人々からすれば「弱い」ところで居直っているような概念をせら笑うであろうし、自分とは関係ないと思われるだろう。しかし、こうしたキリスト教の人間観が文学として表われる時に少なくとも強力に大衆に対する説得力を持ちうるし、又持っているのである。この問題を切開しておかなければ大衆的な思想に切りこむことはできないのかを追及しなければならない。

## アジア研究会の現状

### アジア研究会の現状

七〇年以降「対象としてのアジア」を見失った形で約一年半にわたり主に個々の問題意識をさぐり言葉なれば個々の主体変革を目指すという形で活動を行ってきた。しかし個々それぞれが研究主体となり得ず、また常々「情況への対応」を口にしながらその情況をサークル内に普遍化することができず情況をまきこむことも、情況にのまれることさえもできなかつた。それは具体的には個々の問題が個々の領域にとどまりサークル内で発展させなかつたことでありまたサークル存在、我々にとてはアジア研究会たる所以を見いだせなかつたことである。

サークルにとって研究は生命線であり対象は情況との媒介となるものであり情況への対応は研究を通じる以外にありえない。対象を媒介に研究を通じることがなければ単に情況へのまれるだけである。大学新聞学会闘争、学館解放闘争等々を通じて激しくつきあげられたサークル存在―アジア研究会のアジア研究会たる所以を見い出せざり行つてきた我々にとってそれは強烈なものであつた。

## 英字新聞会

我が英字新聞会は発足してすでに十一年がすぎようとしている。この間我々のサークルは個別明治大学内において、いったいいかなる役割をはたしていたのか。このことをまずもって明確に把握しないかぎり英字新聞会の発展はありえないであろうし、又毎年同じことのくりかえしに終つてしまひ無限の回転からの脱出はありえないであろう。そしてこの作業は六〇年代の我々のサークル運動の総括となり新たなサークル論構築へのかけ橋的存続となるであろう。以下大学におけるサークルの存在

-28-

がどのような役割をはたしているのか又見えていたのかを述べて書きたい。

大学においてサークル活動が生まれたのは「教室」(特にマスプロ教育の教室)における「學問・教育」の不十分性を補うために個別専門的研究課題を求める共同意識所有者が自然発生的に集まつて、総体として研究を行なおうとしたときに○○研究会というのが発足したのである。このように書くといかもきれいに見えるが、しかしこのことはとりもなおさず、「教室」マスプロ教育からの逃避体として成形され、教室では味わえない「いいの場」として、疎外者たちが形成してきたのである。しかしこのことはなんともおさず、「教室」マスプロ教育「友情を深め」などの美句でかぎりたて、サークルのない大学生活などありえない、その楽しさ、有益性が主張されるのであった。そこにおいては自己が大学から疎外され、いたたまれずにサークルへ逃げてきたことなど、とおのむかしにわれされされている。大学に入学した当時のことを思い出せばはつきりと確認できるであろう。そしてこのことから一方ではつらいしんどいサークルへは部員が入らずいこい的、みんなで楽しくやりましょのサークルの繁栄となる。旅行クラブの団員は数百人にも到つている。

本校の学館問題にしても活動内容における質的獲得、アジア研究会のアジア研究会たる所以、それを確立すべく活動を行なわなければ学館自主管理に参加することは無意味である。

それらのことから十月以降我々は対象の奪還、すなわち対象としてのアジアを再びとらえかえす作業を開始している。現在的には更に明確な方向性、方針または個々の持つ問題、サークルへの対応を明らかにするために今までの活動の総括を行なつていきたい。

以上のことを見てみると、なお一層このことがはっきりと認識することができる。大学はサークルを「学生による自主的な教育・研究の場」、そしてつまり学生の厚生福祉の場・学生いこいの場であると位置づけている。そして文化部連合会として大学内の一付属機關として、大学はサークル総体に対し場所的経済的保障を行なつてている。それがため絶えず発生する大学内部の矛盾・教育矛盾を一切隠べイする役割をサークル活動がはたしてきているのだ。これが今日サークル活動を表現するにあたり、何ら主体的に、活動を、自己をとらえかえすことができないことは、そして何回となく、となえられたこととばーサロン化であり、混迷と低落である。何が何だかわからないが、又勉強する必要もはつきり語ることはできないが、何か勉強しておけば就職試験で得をする。つまるところは技術至上主義となり、自己を近代資本主義の競争の法則どおりにきたえてゆく。そしてそこには樂しかった大学生活というように、楽しみしか、大学生活四年間を振りかえることができなくなってしまう。全く大学内部の矛盾すら、自己にせまつくる矛盾すら回避して、ひたすら個別サークルの枠の中にのみどまり、楽しいサークル形成へと自己満足的運動をくりかえしてゆくのである。

-29-

ところが六〇年代後半、とりわけ全共斗運動の勃発とともに、過去のサークル運動の批判が集中的に現わされました。特に当時の政治状況—七〇年安保—に影響されて、特に当時の政治状況—七〇年安保—に影響されて、サークル活動の内容—個別の研究課題を何らかまえずしてサークルを「運動体」として位置づけ政治斗争へと單絡的に結びつけてしまった。それは過去のサークル論—サロソ化の傾向のサークル論への反発として提示されたにすぎないのであって何ら止揚されたサークル論ではなかった。当時各サークルの部員の飛びはねた分子によって、いろいろな斗争委員会が個別に作られていった。そこにおいてはこの政治斗争を我々はサークルとして斗うのか、それとも逃亡するのかというような個別サークル運動の内容をあまり過激していったがため、飛びはねた分子は少數の場合、他のサークル員に対し失望してしまい、サークルをやめてしまい、自から消耗していくってしまった。つまるところ、各サークル員の飛びはねた分子は何らサークルの研究課題を追求せず、それが故懶々のサークル研究活動の延長線上に現存の矛盾—世界の矛盾を設定しないかぎりサークルは単に学生活動化のブルとなり、サークル総体の再生は全くありえないことであろう。そして我々の学生としての場である大学の矛盾—明大解体へ向けた戦いとともに、サークルの存

毎日新聞じみたものであり朝日新聞じみたものであり、編集者は大新聞社の記者よろしく、事件が起きたらカメラを持ってかけつけて行くといった没主体的な人物であった。ところが一方ではそれと反対にラジカルな記事—I大学立法を引っこめるなどの記事が書かれていた。

そしてこのニュース面とそのラジカルな記事との内容の違い。これを統一するためにセクション解説などの修正がとなってきた。しかし、こうにことは、はかどらず、いたずらに時間が経過し、沈黙してゆくのみであった。そういった中で新聞記事に対する自己の責任問題といふことが問題となつた。いっせいに、大学立法を引っこめると言つた人が、書いた人が、真にそのことをそう思つてゐるのか、自己の生活をかけているのか否か、そして大学立法崩壊の戦いを行なつてゐる戦線に対するその書いた人は、ともに戦う意志はあるのか、どう思つてゐるのか。ジャーナリストなどと我々を規定して、それは別問題であるなどと書いてしまされる事ではない。

ここにおいて我々は新たに新聞論を確立させねばならないと思う。前述したように記事内容と書き手の無関係性のために生じる決定的責任性をトータルな形で否定していかなければならない。高橋和巳はその著書「わが

在のものが大学内の、社会内の矛盾を隠ぺいしてきたこと、そして大学の矛盾を見つめずして幻想を拡大始めた。特に当時の政治状況—七〇年安保—に影響されて、それを表わしていると思う。我々が二年生のときのくりかえされたにすぎないのであって何ら止揚されたサークル論ではなかった。当時各サークルの部員の飛びはねた分子によって、いろいろな斗争委員会が個別に作られていった。そこにおいてはこの政治斗争を我々はサークルとして斗うのか、それとも逃亡するのかというような個別サークル運動の内容をあまり過激していったがため、飛びはねた分子は少數の場合、他のサークル員に対し失望してしまい、サークルをやめてしまい、自から消耗していくってしまった。つまるところ、各サークル員の飛びはねた分子は何らサークルの研究課題を追求せず、それが故懶々のサークル研究活動の延長線上に現存の矛盾—世界の矛盾を設定しないかぎりサークルは単に学生活動化のブルとなり、サークル総体の再生は全くありえないことであろう。そして我々の学生としての場である大学の矛盾—明大解体へ向けた戦いとともに、サークルの存

在のものが大学内の、社会内の矛盾を隠ぺいしてきたこと、そして大学の矛盾を見つめずして幻想を拡大始めた。特に当時の政治状況—七〇年安保—に影響されて、それを表わしていると思う。我々が二年生のときのくりかえされたにすぎないのであって何ら止揚されたサークル論ではなかった。当時各サークルの部員の飛びはねた分子によって、いろいろな斗争委員会が個別に作られていった。そこにおいてはこの政治斗争を我々はサークルとして斗うのか、それとも逃亡するのかというような個別サークル運動の内容をあまり過激していったがため、飛びはねた分子は少數の場合、他のサークル員に対し失望してしまい、サークルをやめてしまい、自から消耗していくてしまった。つまるところ、各サークル員の飛びはねた分子は何らサークルの研究課題を追求せず、それが故懶々のサークル研究活動の延長線上に現存の矛盾—世界の矛盾を設定しないかぎりサークルは単に学生活動化のブルとなり、サークル総体の再生は全くありえないことであろう。そして我々の学生としての場である大学の矛盾—明大解体へ向けた戦いとともに、サークルの存

解体」の中で「責任の負えないようなことは、はじめから言葉べきでなく、また一たび表現すればそれは必ず自己を運命化するものであることくらいわきまえているべきだ。」と述べている。つまり記事とその書き手の関係を止揚しなければ一切、新聞発行などできないのだし、発行すべきではないのだ。この間、大新聞争へかかわってきた者として私はこの論争から多くのものを学び取った。その一つは記事と書き手の関係をどう止揚するかであった。マスコミは現代において分業形態をとるもののすぐれて象徴的なものの一つである。それはマスコミの人々は「表現主体」としてのみ表われてくる。そして「運動主体」としては現われて来ない。我々も「表現者」と「運動者」に分断させられていて、又それを当然だと思っていた。そしてそれ故ある事件に対しても表面的にしか取りあつかうことができず記事に対して一種のしらじらしさが残るのみであった。大新聞争に関連して言えはこの表現者と運動者との関係を止揚するものとして存する契機が具体的な矛盾であるところの大学新聞学会編集者に対する処分問題であり、それに対する我々の処分白紙撤回闘争であった。表現者と運動者の矛盾を統一させるのは、つまり矛盾を止揚させる媒介となるものは具体的な闘争の中へ自己を投げこむことによってのみ可能であらう。

個別英字新聞会の場合を見ても以上のことは全く当てはまるとは言えないまでも、過去の我がサークルの内容を表わしていると思う。我々が二年生のときのくりかえされたにすぎないのであって何ら止揚されたサークル論をしてきた討論を思い出してみよう。それはまずセクションの問題から始まりニュース面のつまらなさ—その表面的どちらへ方より一層本質的方面へ展開していく。そしてニュース記事内容の本質的おかしさ—現状、表面のみを取り出し文章化し、その本質を一切語らない。SWI

IHというようにより形式的に客観的に事件をとらえ、ひたすら自己を、主張を隠し、マスプロ新聞の内容とほとんど違わない記事しかでこなかつた。記事といえばデモ

の写真といつどこで監官と学生がぶつかった程度のものばかりであり、たとえあつたとしても全く第三者の立場で一外部からながめた感想じみたもので一外部からながめた感想じみたものであり記事を書く編集者の主体など、まるでなかつたのだと言つてよいであろう。それはまさにブル新のミニ版であり、あるべき我々の新聞の理想はい

にブル新のミニ版であり、あるべき我々の新聞の理想はい

となるのである。

ここで最後に再度くりかえしたいと思う。今までのサークルは大学生活に花をそえる程度であり、自己の生き方と全く無関係にサークルが存在した。しかし我々はそのようなサークルから何も得られないし、自己自身がだめになってしまったことを確認したい。

## 文研活動状況

### 文学研究会

僕達にとって文学とは何かの問題は、諸個人に還元されるものとして、常に問われねばならない説だが、僕達が活動という次元で、文学を考えようとする場合、僕達がまず、ぶち当たるのが、集団としての僕達の問題と、「サークル」さらには「組織」としての僕達の在り様である。それは僕達が文学に関わるものとして、文学をし続け、文学に固執して行くという強引な態度との抵抗として、表われるを得ず、すべて、僕達にとって文学とはという問いの中で解決することを余儀なくされる。僕達は一方で「作品」によって、また一方で「書き手」として、論争し、活動し続けて来たと言わざるを得ない。

六年和泉祭における「表現における諸問題」として

「文学」といった対応の仕方で風化される事を拒み、安易なアンガージュの姿勢を否定して行くものとして位置づけられる。

文学はどこまで行つても個人の内部で完結されるものである。それが社会あるいは、それを「作品」として読む者に影響を与えることは、文学のもう普偏的な「力」である訳だけれど、それを生み出す諸個人にとっては、社会からの要請からでも、政治からの要請からでもない。むしろ、僕らを抑圧して来る社会は僕らの生きる空間にとって「敵」でしかないという対応から、「書く」という行為が始まるのであり、それがいくらかでも社会に選えされ得るのは、文学が、言語という社会を構成する人間達の内部で、媒介として、接しているからに他ならない。

僕達がもし本当の意味で社会あるいは政治に接し得、僕達のアンガージュを完成しようとするならば、言語本質への割り込みを、僕達の文学における完成ということで答えて行く以外方法はない訳である。

文学はやはり、社会にとって無益であり、書でさえあるかも知れぬ。僕達は、ある意味で文学の本質にまで迫まる中から、その中に埋没する覚悟を決めたと言わざるを得まい。現実への参与へは、あるはにかみを持ちなが

の、大岡信、日野啓三を呼んでのシンポジウムから僕達は表現主体者としての自己の創出、とりわけ表現としての文学、表現としての言語の問題に日本浪漫派への批判からとり組んで行った。そこから文研の実質的な活動には「斗わないもの」として存在し続けたのである。サ

である僕らが文学を拒うという姿勢が打ち出され、六月に始まるパリケードストライキにおいて、僕達は現象的に連斗に対する文化論、文化運動論の問題提起も、「斗うもの」としてのサ連斗では想い切れず、僕達の内部における「斗うもの」（文学研究会斗争委員会）もサ連斗の崩壊と運命を共にしたのである。

活動的具体的な形態として、僕達は部門制（日本文学部門、外国文学部門、現代詩部門、本校部門）というものをとて、サークルとしての実態を形成して来たのであるが、パリケード以降、外文の崩壊とパリケード中の活動、部室の使用が、集まる部員数を減らし、一方で各部門の閉鎖的な態度を生み出したと言える。そういう意味で、夏の合宿は、各人・各様の研究課題の深化と発表を行なわれた合宿は、各人・各様の研究課題の深化と発表を求める、中心的には「存在拘束性」の問い合わせられた。それは僕達がサークル、あるいは組織、さらには社会と関わる断面において、僕達の位相が、いわゆる「政治と

らも僕達が「書く」という「あの瞬間を」持続させることがで答え得ると思う。

後期からは、夏の合宿を踏まえる中から、再び「政治と文学」的な問題を、日本における土俗との関連の中から研究し、活動の形としては部門制の実体の崩壊を構座制へと向けて行つたと言える。実際僕達が「表現者」としてのあるいは「書く」という態度を学び、自己のものとしながら活動の次元においては、あいかわらず読書会ということしかなし得ぬことは、僕達の活動における一つの矛盾といわねばならなかつた。そういふ意味で、僕達も「書いて」行くことが、活動の場に取り出され、また、そのことは僕達の「読む」ことへの深化をも同時に企てるものとして打ち出して来たと言える。

六年年末から、七〇年三月に至るまでの活動の総括的把握論議から「いすみ」が発行され、文研の雑誌「明大詩人復刊二号」「明大文芸二十一号」も相続して発行された。

七〇年度に入つて新入生を迎えてからの僕達の活動は、まず、実体のなくたった部門制を構座制に変えて行くという姿勢で、充実した研究を、諸部門に課せて行つたのである。一つには和泉祭へあるいは夏の合宿に向けての方向性がそこにあったと言える。それは僕達が「書く」

といった場合の内容を深化させることであり、僕達が普遍的にいたいに来た、言語・文学そのものの秘密にまで迫る活動としてあったと言える。

七〇年春、和泉祭において、「銀河鉄道の彼方へ」という表題の下に、入沢夫を呼んで宮沢賢治を扱った。

賢治の生活者としての側面、実験者として、革命家としての側面を一方でとらえながら、日本におけるところの、ある意味で「文學者」の課題にとり組むと同時に、作品空間にのめり込むなかから、天沢の「作品行為論」的な「読み」に接して行くことが中心であった。「作品」へのめり込みは、作品を作品として読むところから始まるのであり、「實際そう読めるのか」が、僕達に対する問い合わせである。そういった僕達の「読み」を獲得する為にも僕達は自身の「文學」を構築して行かなばならぬ訳であるし、「文學とは何か」の本質に迫り得るものである。賢治は「作品」への関わりを自己を作品と化する態度にまで高めたと言える。それは「作品」そのものが内包する、文學的本質—言語と存在とにまで開わる主体として自己を深めたからだと見える。賢治の童話には深い、それ故「暗い不健康な情念の焰」が燃えている。それは文學をなす主体に対する、激しくも、重い焰である。僕達も又、「私は文學でしかない。しかもそれ以外

といふ負のバストから「書き得ぬもの」まで書くという正のバトスへ転化させようとする姿勢へ連なるものとしきつた。そういう姿勢が、後期における諸活動、諸構座の成立を生み、一方で、ガリ刷りによる諸雑誌が次々に発刊されるに至った。諸構座、ある決められた枠組、日本文學部門とか、詩部門といったもので僕達の活動が規定されることを排するというやり方で、諸個人がとり組む課題を提起し、それに賛同する人間を集めて、活動するものである。原則としては、どんな範囲をも統けることなく、文學はもちろん、哲学・映画・演劇・社会科学・自然科学にまで、僕達の貧欲な姿勢を、活動の次元に拡げることにより、「文化」そのものにまで迫ろうとするものである。

しかし七〇年駿台祭への不参加は、そういった幅広い活動と、研究課題を、サークルの次元でどう集約し、方向性を与えて行くのかに失敗した為とも言えないだろうか。僕達が膨大な課題を、僕達の文學・文化に課した時僕達にとって、それを担うだけの力量が不足していたとも言える。僕達にとっては、まだ「書く」とことや、個別の研究を深めることを永続化していくことが要請されたのである。

のなものもあり得ない、あろうとも思わない」といふたカフカの地平を賢治の中に読みとることが出来ないだろうか。文學とりわけ「作品」への関わり、のめり込みという僕達の姿勢は存在そのものに対する問い合わせであり、「死」そのものにまで迫ろうとする。「死」そのものも僕達の「もの」にする為の、不可能への接近として位置づけられる。「書き得ぬもの」まで書くという、とてももない企てが文學においては可視の範囲に入ってきたのだ。

夏の合宿においては、賢治、あるいは安部公房、カフカ等を踏まえた諸活動グループが、ロートレアモン、パシュラール、カフカ、芥川、等のグループに別れ個別研究を深めるといった形で行なわれた。僕達の「とてつもない企て」の表出を、七〇年安保斗争への、しらけた戦いに参加し、破れた次元で構築しようとするものであった。「悪魔祭への招待」—言語空間の暴力性を呪術性—という表題は「書く」ことを撰び、その中にのめり込んで来た僕達が読み手の内部に形成される世界（作品空間）を死に限りなく近づける「力」を、僕達が、生きるという姿勢で、正に、存在を賭して、存在そのものであるような「作品」を創造して行く方向性への布面でもあつた。「何も書くことはない」ということについて書く

七一年度においては、まず、和泉祭において文化を担当するとの僕達の力量を、駿台祭の失敗から学び、現実化して行こうとする姿勢が見られた。個別に研究課題にとり組み、総体として、和泉祭の場において、「文學とは何か」の問題にとり組もうとしたのである。サルトル、吉本隆明、ブランショ、A・ブルトン、大岡信、高橋和巳といった、文化・文學・思想に関わる著名な作家達から、かなり巨視的な視野から、僕達の文學に内実を与えたのである。一方活動においても、サリンジャー、近松門左エ門、ロートレアモン、戦後詩、大江健三郎、カッシャーラー等の、諸構座を設け、「文化」に迫る活動をし続けて来たと言える。

夏期の合宿においては、深沢七郎一人を撰び、「文學における邊境と侵犯性」の問題を中心とり組んだのである。僕達はこれまで文學を自己に引き込むとともに、自らが「書く」ということによって、文學（作品）に引き込まれて来た訳であるが、それを直線的に存在に結びつけるという筋に対しても、その筋そのものは解っていないがら、存在そのものにまで高めるには多くの欠落があることが解る。それは広範な「文化」に接し、僕達の内部に構築して行く姿勢をして一方にあたる訳だけれど、一方その存在そのものにまで高める為には諸生活内部、共同

体、精神的な共同体、聖性、神性の中にまで、まさぐりを入れる必要があるものである。

深沢への接近は、まず、「読み方」の問題から「作品行為論」的なものを再考し、僕達自身の「読み」を深めることに始まつた。時代や作家個人の立場からアブリオリに「作品」が語られる訳ではなく、「作品」として読む中からその構造をとらえ「文学」そのものを読みとる姿勢が僕達には必要なものである。

そして後期における駿台祭においても、「読み方」の問題をつきつめようとして来た訳である。言語論(吉本、ブランショ、天沢、寺田)を一応踏まえて、再度深沢を僕ら自身で読む事を、ある意味で作品行為論に対するアーチの立場から具体的に「批評」今まで迫ろうとする姿勢へ打ち出したのである。それは僕達の読み一批評を構築しようとする志向であり、当然批評軸としての「価値」を求める行為でもある。僕達は具体的に、詩や小説を書いて来た訳であるが、当然そこにおける批評の軸としての詩論や小説論さらには文学論―文化論めいたものの構築にまで迫らねばならないと考える。

現在、正に、文化サークル連絡会議への参加は、現実の政治過程―政治課題への取り組みの中から、サークル論として、僕達の文化・文学を担う主体の存り方をまざまざと文化運動論への構築を、僕の論に対する批判から豊富にしてもらいたいと思う。

(文責 I)

### サークル運動論へ向けて

僕達の姿勢を、文学を担うなかから構築しようとするところの最初の試論の序章の一部にしか過ぎないのだから、すぐにでも次の試論を示して欲しいと同時に、文学論の深化と文化運動論への構築を、僕の論に対する批判から豊富にしてもらいたいと思う。

(文責 I)

僕たち文学研究会の基調はまず個別課題としての「書くこと」にある。僕たちは文学を志向する者たちの集団であり、「書く」という実践を媒介として他との関りを持とうとする。「文学」についてのおしゃべりから何よりも生産的なものは生まれないからである。しかしながら「書く」ということは個的な営為であり、必ずしも集団を形成しなければならぬものではない。では何故、僕たちは集団として「文学」を担おうとするのか。それは決して「ひとりでやるよりも多勢の方が」といった力学的、な問題からではなく同時代性、同課題性をもつ他の関係性のなかで自己をより明確化してゆくためであろう。そのときたとえ最初は何となくといった気持からであったとしても、一旦、集団を形成し自然発生するものとしてある。そういった中で、僕達は具体的に「作品」を創造していく事で、文化論、文化運動論に迫る姿勢を具体化して行かねばならないだろう。僕達は安易に「文化」を語りはしない。僕達の居る地平が大きな情況、とりわけ「政治」という名で呼ばれるところの「現在」に直線的に引き出される論理過程にはないからである。何よりも自己自身の存在を、文化を担う姿勢の中で答えて行くことが「政治」に連なるものであるだろう。

ここまで書いて僕はこの論者が、決して文研の合議により作成されたものではない事、一面的な、ある現象をとらえたに過ぎぬことを付け加えておかなければならぬと共に、これらは文研に居る諸個人にとっては、とりわけ、現在和泉において闘わされているところの、サークル存在的の在り様と文化・文学をめぐる論争に対しては、ある一定の、「資料」を示すに過ぎぬことを明確にしなければならないと思う。

「歴史はそれを書く個人によって歪曲されるものである」とことを踏まえつつ、客観的になど書けようがないのだといふ事を述べておく。僕の力量の範囲においての「文研史」と若干の文学論であるのだから、どんな批判も受け入れる用意がある。一定の「まとめ」と文サ連への、

べきであろう。「書くこと」とは自己の内なるものと向き合うことだ。ひとは外に向って晒されているのと同様に内に向って晒されている。内といふものは決して安全な逃避場ではない。外がそうではないように。おそらく逃げ場などどこにもないのだ。

僕たちは個別の課題を担うと同時に、サークル総体としての課題にも取りくまねばならない。それは基本的に既成の文化概念（正統性）に反逆し、新たな文化運動（総体）を惹き起こすことであり、社会構造の矛盾から発生するあらゆる非人間の状況を人間的なるものへと解放してゆくことであるだろう。これは永続的な課題としてあるのだ。そしてその永続的な課題から導き出される現実的なひとつ目の課題として、学生会館ロッカウト＝全サークル全集団に対する彈圧の問題があり、学内ロックアウト体制＝学生管理支配の問題があると言える。

サークルに於ける内外的課題は決して対立し相入れないものであるのではなく共同の課題として同時的平面上にあるものなのだ。

僕たちサークルは個別にそれぞれの課題をもつてゐることは言ふまでもない。それらの形態は異なり、同じよう考へることはできないのも自明のことである。たとえば、個別「音楽」の質的な向上を目指すと同時に総体的な課題（対社会的な）をも担う必要があるのだ。

「教育」「社会学」「文学」「音楽」「絵画」等、それら「文化」を総体的に捉えつつ学生会館解放、大学解放、等を美体的におし進めてゆかねばならないだろう。

全サークル特に「芸術」サークル員諸君の文化サークル連絡会議への結集を呼びかける。

（文責O・M）

えは、現在的に「教育研究会」は「教職課程」に於ける矛盾との闘いのなかから「教育とは何か」という問題を提起し、自らその間に答えるようとしているサークルもあるし、「理論社会学研究会」のように「社会学研究会」内部の本質的矛盾と対抗し、訛りを告げるなかで「社会学とは何か」「サークルとは何か」という問を提出しているサークルもある。また僕たち「文学研究会」のようない「文学」を実践的に捉えるなかで「文化」という総体を捉え、他との闘いのなかでサークル全体の運動を担つてゆこうとするサークルもある。その他種々な個別課題をもつたサークルが存在する。だがこれら諸サークルの存在の有り様には、基本的姿勢としてふたつに大別することができるよう思われる。ひとつ与えられた存在（大學の補完物としてまた既成文化の枠内）のなかで充足してしまう存在。もうひとつに自立したサークル運動を開してゆこうとする存在のふたつに。また意識性の問題としても同様である。ひとつに個別課題以外は受け入れず、またその活動にオリジナリティを持ちえず、踏襲のみに終始しているサークル。もうひとつに根源的（ラヂカル）にその個別課題を追求してゆくなかで普偏的なものを見出でゆこうとする姿勢をもったサークルのふたつに。サークルというものは対社会的に自立しえね

明治大学文化サークル連絡会議  
機関誌「サークル戦線」創刊号  
一九七二年一月発行